
弱者は努力する。

素浪人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弱者は努力する。

【Nコード】

N3862Z

【作者名】

素浪人

【あらすじ】

織斑一夏が世界初のISを動かした男として注目を受ける中、日本はもしかしたらまだ居るかもしれないという期待を込めて男性に対してIS適正を調べる検査を行った。そして浮上するさらに二人の男性。

一人は才能の塊。

もう一人は……。

プロローグ

神様のミスにより転生。

二次創作の話では良くある話だ。

何故なら簡単に物語の世界にイレギュラーを入れられるからだ。

しかし、この理由はありえるのだろうか？

神様がミスを犯す。普通なら考えられない理由だ。

だが、所詮は創作話の話だ。それくらい許されてもいいだろう。

話を今に戻そう。

俺は今、真っ暗な空間にいる。

伸ばす手の先も見えないほどの黒・黒・黒。

ここまで来ると闇という言葉がぴったりだろう。

その世界にぼんやりと眼鏡を掛けた中学生っぽい女の子が現れた。

「ご、ごめんなさい。か、神様ッたら間違えてあなたを殺してしま
ったみたいで」

人を間違えて、ね。ほんとかな？ わざとじゃないの？

「う、そそ、そんな事無いですよ。ほんと神様ッたらうっかりやさ
んで……」

……もうその話はいいや。

それで？

用件はなんだ？

「え？ は、はい。そのですね。申し訳ないんですが、あなたにはお詫びとして物語の世界に転生してもらおうかなと思ってまして」

……………そうか。

「……………そうですね。転生していただくのは『IS インフィニット・ストラトス』の世界となります

あなたは主人公と同年代で、まったく関係の無い所に住む事にはなりません。物語が始まった途端に主人公たちに召集を受ける事になってますのでご了承下さい」

分かった。

「あ、特典の方ですが、要望は聞きますよ？ 何がよろしいですか？」

……………それよりも一つ、聞きたい事があるんだけど。

「あ、はい。なんででしょうか？」

……………これから俺が行くその世界って、他の転生者は居るのか？

「えーっと……………、はい。いますね。一人同じ理由でなくなった方がいらつしやったので、既に転生済みです。ちなみにもう転生させる予定は無いので、実質この世界のイレギュラーはあなたたち二人だけです」

……………分かった。

「それで、特典はどうしますか？ 内容によっては2、3聞きますよ?。」

転生者の能力を破壊する力が欲しい。

それと良かったら強力な催眠術を教えてください。

「催眠術のほうは軽いのですが、転生者の能力を破壊する力ですか？ これは結構容量食ってしまいますねこのままだとこれは渡せないかもしれません」

だったら、既存の力を削ってくれ。

……… そうだな。IS適正を削ってくれ。それとそれ以外の身体能力とか、どうせ過剰に供給してるだろうから普通レベルまで落としてくれ。

「なるほど、それなら大丈夫です。転生者の能力を破壊する力ですが、完全にオリジナルなので新たに創造しないといけないんですが、どういった風に使いますか?」

……… フィールドタイプで行く。

自分自身を常にそのフィールドで包んでいて、触れるだけで転生者の能力が破壊されるような物だ。

「なるほど、了解です。相手はたった一人ですが用心深いのですね」

……… まあ……… な。

「はい、では頑張ってきてください」

女の子の姿が闇の中に消え、そして意識を失った。

俺が貰った能力は転生者の能力破壊。

これはフィールドタイプで完全オート。知らずに転生者と接触でもしたら相手の能力は今生では使えなくなるだろう。これで身を守れる。この力はこれからの『俺』のための大事な力だ。

『俺』はきつと様々な困難に巻き込まれるだろう。その最たるものがもう一人の転生者だということは簡単に予想が付いた。だからこそ自分の力を削ぎ落としてまで手に入れた能力だ。これならきつと身を守れるだろう。

もう一つ。これは催眠術の知識。

能力としなかったのは、これ以上余計な力はいらなかったからだ。

正直に言おう。俺は転生を望んでいない。

俺の今生はいわば玩具だ。

神だとかそんなような生き物？の操り人形としての生で、幾ら意識しないようにしてもその知識がある限り俺は奴らに縛られ続けるだろう、おれはそんな人生望んでいない。俺としての人生は前の世界での生活だけだったんだ。こんな誰かの操り人形になるくらいなら。

こんな人生はいらない。

俺は今、赤ちゃんになっている。

母親らしき女性がこちらに向かって涙を流しながら喜んでいる姿を見て。俺はこう思う。

「今、あなたに素敵なプレゼントを贈ります」

俺は催眠術の知識にある自己暗示を行うため、自らの視界に自分の握りこぶしを入れる。

それではさようなら。

そして俺は自らの記憶を全て消した。

プロローグ（後書き）

能力ってのは物にもよるけど強力なものは本当に協力だからね。だからどんな能力ではとりあえず破壊しとくといい。転生者殺しの力となっています。

1 現在まで（前書き）

一気に話を進めます。

1 現在まで

こんにちわ。僕、一宮羽いちみやねと申します。

突然ですが、今僕、なんとあのIS学園に通っています。

どうしてこんな事になってしまったのか。簡単にはごさいます、ご説明します。

高校受験を控えたとある一般学生だった僕はある日、何気なく新聞を見るとすごい事が書いてありました。

「世界初、男性『IS』操縦者誕生！」

そう、あの『IS』に乗れる男性が現れたのです。

ああ、ちなみに『IS』っていうのは、とある天才が開発したパワードスーツの事です。

省略せずに言うと、『インフィニット・ストラトス』と言う名前です。本来は宇宙に進出するための物だったらしいのですが、なんだか戦えてしまったので、今では核兵器よりすごい武器になっちゃってます。

これのお陰で世の中は男尊女卑から女尊男卑の世界になっちゃいました。

そんなすごい『IS』に乗れる男性である織斑一夏くんが存在で、日本は「もしかしたら、他にもいるかも！」と思ったようで、全国で一斉にIS適正検査が行われました。

そしてそして、何故か何故か僕にIS適正があることが判明しました。自分のことながらびっくりです。

そういうわけで、僕は世界で三人目の『IS』操縦者となりました。何がなんやら分からないうちに、政府の偉い人たちが来たり、ISを実際に触ってみたり色々していると、いつの間にかIS学園にいました。

いつの間にかと言うのは語弊がありましたね。政府の偉い人に今日からここに行きなさいとIS学園に連れてこられて入学手続きをした後、三日ほど、近くのホテルで必死に教本を読んで過ごしました。

IS学園に入学。そして初授業。クラスは1年1組でした、

クラスには他の男性IS操縦者がいます。全員このクラスにまとめられたんですね。

そして

「はじめまして、一宮羽と申します。世界で三人目の『IS』を用できる男という事でこの学園に呼ばれました。ISの適正は低かったです。精一杯頑張っています。よろしくお願ひします」

といった感じの挨拶をしました。

クラスメイトからはたくさん拍手をいただきました。

そして最初の休み時間。

何故か二人目の男である新島要さんにいしまかなめに屋上に呼び出されました。

はて？ 何の用でしょうか？

疑問に思っていると、要さんがいらだったように話し掛けてきました。

「なあお前、転生者だろ」

「え？ 転生者………？」

「とぼけんなよ！」

突然僕のほうに迫り、胸倉を掴んできました。

すると、「パリッ！」と割れるような音がしたと思うと、要さんが

身に付けていたペンダントを見て呆然としていました。

「どうしたんですか？」

「……………」

返事がありません。

良く分からないので首を傾げていると、いつの間にかもう次の授業の時間が迫っていたみたいです。

「もうすぐ次の授業が始まるから急いだ方がいいよ」

呆然としている要さんに一言告げ、僕は教室へと急ぎました。

授業中、途中から教室に入ってきた要さんは織斑先生の出席簿アタックの出迎えを受けてました。

さらに次の休み時間。

突然イギリスの代表候補生だというセシリア・オルコットさんに絡まれました。

そしてその後の授業で、男性操縦者＋セシリアさんの計4人でクラス代表の資格を賭けて戦う事になりました。

僕は入学早々のバトルと言う展開に驚きながらも、だが無様な戦いは出来ないという猶予の一週間で出来る限りの事はしたつもりでした。

僕が使ったのはフランスはデュノア社のラファール・リヴァイヴというISです。なかなか万能なISらしいです。

他の方のISですが、全員専用機を持っていたはずですが、何故か要さんの専用機が壊れてしまったようで、代替として打鉄という国産ISを使っていました。

それで戦いですが、総当り戦で結果、僕は要さん以外の全員に負け、1勝2敗という成績でした。

要さんとは初戦同士だったんですが、何故か棒立ちだったので手に持った銃を乱射していたら勝ってました。

セシリアさんとの戦いですが、彼女はブルーティアーズというカッコいい名前のビット兵器を駆使して攻撃してきました。これらのビット兵器4つがそれぞれバラバラな動きをして攻撃してきました。こういうのってきつと自分の意思で動かしているはずだから、彼女は4つのビットを自分の意思でばらばらに動かしていると言ふ事に気付いてすごく驚きました。セシリアさんはすごいですがその分、彼女本体は棒立ちだったので銃で撃つてダメージを与えられました。危うく完全試合になる所だった。

一夏くんとのは戦いは勝負になりませんでした。幾ら銃を撃つても当たらないんです。ひゅんひゅん躲していつて、いつの間にか懐に入られて切られてお終いでした。一夏くん強いです。

結果としてクラスの代表は一夏くんに決まりました。僕も応援しています頑張ってください。

とまあ、ここまでが僕に起こった出来事でした。すごい人たちばかりで感心するやらびっくりするやらです。

でも僕はこの戦いを超えて思ったことがあります。

それは『くやしい』という思い。

同世代の一夏くんに簡単に負けてしまいました。

男の子としてこれはとてもくやしい！

と言っわけでいつかりベンジできるように必死に練習する事にしました。

今も部屋で気合を入れています。

「おー、今日も頑張ってるね。羽ちゃん」

同室の本音ちゃんも応援してくれています。

「うん。一夏くんやセシリアさんに負けないくらい強くなるよ僕は」

「がんばれー羽ちゃん」

うん。頑張る！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3862z/>

弱者は努力する。

2011年12月14日00時50分発行